特集　がんで逝った33歳の母が、5歳の娘に遺したもの

天国のママと約束。はなちゃんのみそ汁

小学6年生のはなちゃんは、毎朝、味噌汁をつくっている。それは、5歳の誕生日からの日課だ。「食べることは生きること。一人でも生きられる力を身につけて」と、33歳で亡くなった母・千恵さんと約束したから――。

はなが、玄米和食の給食で知られる福岡市の「高取保育園」に入園できたのは、とても幸運なことでした。写真は、保育園で千恵とはなと一緒に、はじめての味噌仕込みを体験した時の様子。千恵の食事療法の基本は玄米と味噌汁。そして、適度な量の肉や魚も食べる玄米和食。現在も、この食卓がはなとぼくの健康を守ってくれています（信吾さん）

命がけの出産

《私は、がんになった後に、ムスメを授かりました。だから、この子を残して、死なないればなりません。（中略）だから、厳しいと揶揄されようとも、彼と彼女が自分の足で生きていけるようになるまで、心を鬼にして、躾をするまでです》（2008年2月16日）

ブログに綴った5か月後、安武千恵さんは逝った。当時5歳だった一人娘・はなちゃんを遺して。

小学校の音楽教師をしていた千恵さんが乳がんと診断されたのは2000年7月、25歳の時だった。交際していた西日本新聞社の記者・信吾さんは、悩んだ末にプロポーズ。手術を受けるか迷っていた千恵さんはプロポーズに勇気づけられ、左の乳房を切除し、がんを取り除く。

その後、2人は結婚し、千恵さんは妊娠。不安はあった。妊娠中は女性ホルモンの分泌が増えるため、がん患者にとって出産は再発のリスクを背負う。だが千恵さんは周囲の支えの中で、命がけで産むことを決意。2003年2月、女の子を出産した。

《花は愛すべき人に贈る。受け取った人は、花に心が癒される。誰からも愛され、人を癒し、やさしい女性に育ってほしい》との願いを込めて「はな」と名付けた。

その願いに沿うように、はなちゃんは、家の中をいつも明るく、笑顔で家族を癒す存在となった。

だが、はなちゃんが9か月になった頃、恐れていたがんが再発。食生活の改善やホルモン療法で一時は奇跡的にがんが消えたものの、再び体調が悪化。2006年10月には、がんは全身に転移した。抗がん剤や食事療法などさまざまな方法を試すが、千恵さんははなちゃんを抱くこともできなくなった。

《「ごめんね。ママはビョーキで痛いからね、抱っこできないの」と言った日から、ムスメは、私に向かって「抱っこ～」と言わなくなった。たったの一度も》（2007年6月1日）。

娘を遺して

2008年2月20日、はなちゃん5歳の誕生日。千恵さんのがんが肺に転移してから5年目に入った日でもある。

「5年生存率は数％」といわれた日から、ここまでくることができた喜びを千恵さんはこう綴った。

《本当に、命がけで産んでよかったとあらためて感じております。今は、私が、ムスメから寿命を延ばしてもらっています。ムスメの卒業式まで。ムスメの卒園式まで。ムスメの成人式まで。ムスメの結婚式まで。ムスメのこどもが産まれてくるまで。できる限り延ばしたいものです。天から私たちのところにやってきてくれた宝物だから、十数年後にきちんと社会にお返しできるようにこころをこめて育てなければ、と、あらためて思ったしだいです。勉強もスポーツも何もできなくてもいいです。人様にご迷惑をかけることなく、元気で幸せに生きていてくれたら。それで満足です。5歳になったから、一昨日から、朝ご飯の支度はムスメに任せることにしました。見ていたら、包丁使いがかなり怖いのですが……声と手を出したいところをぐっと我慢》

それからというもの、階段を駆け下りるかのように容態は悪化。モルヒネで痛みにも耐えて生き長らえたが、2008年7月、千恵さんは33歳の生涯を終えた。

日本中が感動

壮絶な闘病の末に最愛の妻を失った信吾さんの喪失感はあまりにも大きかった。

信吾さんが振り返る。「先が見えない、未来が見えない状態で…子育てをする自信もなく、途方に暮れて酒ばかり飲んでいました。夜、祭壇の前で遺影を見て、しくしく泣きながら…」。

そんな状態が1か月以上続いたある朝、信吾さんがつらそうな表情で台所に立っていると、傍らで、はなちゃんが包丁を取り出した。豆腐を小さな手のひらの上にのせ、ゆっくりと切ると、ガスの火をつけ、カツオの出汁を張った鍋の中に入れる。その手つきは驚くほど手なれていた。

「千恵は亡くなる前から、はなに味噌汁づくりや玄米の炊き方などを教えていた。『自分がいなくなっても2人が困らないように』と。料理だけでなく、お風呂掃除や靴ならべ、洗濯物たたみ、自分の洋服の管理、保育園の準備など、やらせてみると、はなは身の回りのことはほとんど一人でできるようになっていました」（信吾さん）。

以来、はなちゃんは毎朝、味噌汁をつくるようになった。「ごはんと味噌汁は元気をくれるって、ママが言ったんだよ。ママと指切りげんまんしたから、はな、毎日つくるよ」と言って。

11歳になったはなちゃんの味噌汁づくりは、今も続いている。

「厳しくしつけをしていた千恵は、はなにとってはこわい存在だったと思います。今も千恵にずっと見られているという感覚があるのだと思います。『お母さんが天国から見とるから』とよく言いますから」（信吾さん）。

「パパががんになって死んじゃったら、はなは一人ぼっちになる」。はなちゃんの一言をきっかけに、信吾さんは、タバコもやめたという。

刊行後の反響

信吾さんが千恵さんのブログ『早寝早起き玄米生活（ハンドルネーム：六本松さくら）』に自分の思いを重ね、はなちゃんの手紙をまとめた、「はなちゃんのみそ汁」が書籍化（文藝春秋）されたのは2012年。

その後もさまざまなメディアに取り上げられ、話題になった信吾さんとはなちゃん父子。朝、かつお節を削る姿がテレビで紹介されたのをきっかけに、2013年3月には、鹿児島県枕崎市の枕崎水産加工業協同組合から「枕崎鰹節ジュニア大使」に任命

はな、毎朝のみそ汁つくり、がんばってるよ。
天国のママとの約束だからね。

「朝日新聞」「24時間テレビ」ほかで大反響。
人気ブログ「早寝早起き玄米生活」の一家の物語。

メディアで大反響の感動作、待望の文庫化！
食べることは生きること。
「生きる力」に心を揺さぶられる感動の記録。

『はなちゃんのみそ汁』
発行／文藝春秋
著／安武信吾・千恵・はな
定価／本体580円＋税